

クロストーク

「関わり続けるという定住のカタチ」と信頼の創生

関西大学 TAFS 佐治スタジオ研究員 出町慎

×

商業施設技術者団体連合会副会長 山田悦央

＜佐治での取り組み＞

出町： 僕らがやってるプロジェクトは、「かかわり続ける」というのがコンセプトになってます。僕らが活動しているのは兵庫県の丹波市の青垣町というところで、丹波市の中でも一番北の方にあたります。

山田： 盆地ですね。



出町： 谷間、谷筋で、3 つくらい谷が重なっている中心のところに宿場町が発達してまして、谷筋ごとに農村集落が広がっているような感じです。真ん中に川が流れてまして、パラグライダーがすごく有名で、谷筋ということでいい風が吹くらしいんですよ。地形的にもおもしろくて。僕らも建築学科として活動を始めたんですけど、実際には山とか農業とかそういったものを含めてトータルを考えていかないといけないんじゃないかって

いう視点に立つことになりました。じゃあ、どういうふうにして地域の再生考えていけばいいのかっていうときに、建築だけやってるとかそんなじゃなくて、山のことも考え出すと、1年、2年というスパンじゃとても何も変えられないというところがあります。ずっと長いこと継続できるしくみをまず作って、そのなかで地域の再生をいろんな人が考えて、続けていくというしくみをつくろうというところがスタートです。僕ら大学が(地域に)関わることはいろんな意味でメリットがあって、さっき言った持続的に関わるっていうことも大学だからできることのひとつ、メリットでもあるのかなと思っています。関わり続ける主体の学生が毎年毎年たくさん入ってきて、関大は特に学生数がとびぬけて多いので、そういう意味では、非常にたくさんいるからこそできることかなあという気もしています。

一：今どのくらいの若い人が参加してるんですか。

出町： 延べでいくともう 1500 くらい。

山田： すごいなあ。すごいですね。

出町： その学生たちもう 5 年目ですけど、

関わるの。卒業した子たちもけっこう来るんです。

山田：へー。

出町：結婚して、家族連れてきたり。職場の先輩と一緒に来たりとか。

一：それは大きいですね。

出町：僕らが常において、その借りている拠点が開いているので、いつ来てもいいから来られるみたいな感覚だと思います。

山田：宿舎もあるの。

出町：そうです。僕たち今借りているスタジオは泊まれるんです。

一：そこの内装は学生たちがやってるんですよね。

出町：そうです。

一：すごくおしゃれですね。

出町：そういうのに関わった学生はやっぱり思い出もあるので、すぐ来るっていうのもあるし。

山田：ありますよね。

出町：だからそういう所も含めて、どうしたら卒業しても関われるのか、どんな人と関われるのかっていうのを考えながら、いろんなプロジェクト打っていったところがあります。僕は奈良育ちなので故郷をもっている人間ですけど、こういう故郷をもたない子どもたちが増えてきているみたいな話はけっこうあって。

山田：第二の故郷みたいな感覚だね。

出町：そうですね。そういうのもつってすごく重要なことなんじゃないかなと。おばあちゃんの家に戻るような感覚で僕たちのところにも来てくれるようになると思うといいんじゃないかと。



<佐治スタジオの発想はどこから？>

出町：5年ほど前、日本建築学会の近畿支部の120周年記念事業がありまして、その時、まちづくりのシナリオ提案を求めるようなコンペが企画されました。その時の企画のサイトがこのまち（佐治）だったんです。たまたま丹波市が手を挙げて。それで僕たちも応募しようとして研究室でチームを作りまして。丹波市はまちづくりのシナリオとして定住人口をこれからどう増やしていくのかということのを重要な課題としてもっていたんですけど、実際のところ提案するのはなんぼでもできるんでね。

山田：そうですね。（実際に実践するのは）難しいですね。

出町：実際、（その提案は）ほんまに意味あるかなって。「こういう提案したらお前住むか？」みたいな話になって、「いやけっこう生まれへんわ」みたいな、そういうのはやめようっていう話になりました。

山田：なるほど。

出町：僕らがそこで定住できるとすれば

どんな方法ある？みたいな中から、関わり続けるみたいな感じやったらいけるんじゃないかな。

山田：メンバーが変わりますからね。

出町：メンバーが変わるし、持続的になんかやるってことが絶対重要やと僕らのなかでは当然なんですよ。単発で終わるようなことは意味のないことやとなったので、こういう形がいいのかなと。なんかしょっちゅうしょっちゅう行くような感じええやんみたいな。

山田：まさしくまちづくりの原点ですね。

一：ほかにこういう例はありますか。

山田：持続的にやってるっていうのはなかなかないです。一つのテーマがあってそれが完結すれば終わりというのはありますけどね。答えが出ないですけどね。答えは、ずーっと求めて続けていくっていう感覚ですかね。

出町：パッと絵を描いて、わっと一時的に事業なんか盛り上がったって、そういうことはできるんですよ。それ本当に重要なことかっていうと、ある程度ビジョンは必要やけど・・・。

出町：僕らランドデザインっていう話をするんですけども、その時々に応じてどんどんそのデザインのコンセプトとかテーマを変えていく。

山田：変化ですね。

出町：それを受け入れていくようなしくみづくりっていうのが重要なんじゃないかな。

山田：おもしろいですね。これはほんとのまちおこしですわ。これからのね。

出町：これからの。

山田：これからのまちおこしはこれが原点ですよ。変えていかないと。一人の人がずっと関わるんではなしに、力を抜いて、その都度その都度都合のいい時に行く。そしてずっとまちへ帰るっていう感じのね。第二の故郷みたいな感覚ですね。

出町：そうです。僕たちの学生が継続的に関わるっていうのがあったんですけど、まちにとってみれば、若い人たちが出ていくっていうのは一つの問題で、人口が減っているっていうときに、どうしても丹波市だと外から移住者を入れてくることしか考えない。けど本当いうと、そこに住んでいる人たちが、若い人たちが、将来にわたって住み続けたいと思うためにはどうしたらいいのかみたいなことをもっと考えなきゃいけない。だからそういう出て行ってしまふ若い子たちも、また関わりたいと、僕らと同じような感覚で、年に1回しか帰ってこなかったのが年に3回は帰ってくるようになる人が増えてきたとか、ちょっと休みが取れるとやっぱ故郷へ帰りたいたいと思う子が増えてくるとかっていうことも、大きな定住効果じゃないかなと思うんです。

山田：そうやと思いますね。今までの行政のまちおこしの場合でしたら、一つの産業をね、工場誘致をして、雇用対策をして、人を入れる、増やしていくという感覚でしたけど、これ違いますもんね。

出町：ちがいます。

山田：外で生活するなら生活してもいいけど、自ら帰るといふ。ちょっと土曜日、

日曜日ほっとして帰ってその空気感を味わう。それおもしろいですね。



出町： そうなんですよね。丹波の、たまたまこの場所で行えることになったんですけど、ここだけで成功する事例になっちゃいけないっていうのもありましたね。こういうことがどこでも起こる。同じように考え方って使える、いろんなところで参考にしてもらえ活動にしたいなって。なので関わり続けるっていうことをいろんな地域に提案していく。僕の第三の故郷は淡路島なんですけど、淡路島も全然家があるわけではないですけど、いろんなプロジェクトで関わり続けて故郷みたいですから、そういったことを徹底するっていうことで、常にどこかで関わることで。

山田： ちょっと内容は違いますけど、ようするに天神橋筋商店街とかこれやってるんですよ。土居（年樹）さんこれやってるんです。というのは、土居さんはずっとそれに関わっている。ですけど土居さんの周りのブレンっていうのは逆にいえばその都度その都度変わる、変化している。変化をしてきて、その一つのプロジェクトに対して専門家の方が入ってくる。

出町： なるほど。

山田： いろんな人が入ってくる。それで一つのイベントができて、できればまた違うイベントは次の人がまたやると。もうみんなが関わっている。その中で持続性がずっとある。ですから、全くこれも同じことなんです、まちづくりに対して。ですからそのスタッフの学生が独身の時にここでやっていて、今度結婚して子どもができたらまた遊びに行こうやって感覚ね。それを受け入れられる土壌があるわけです。ここにはね。

<まちの居場所づくり>



出町： 僕らがキーにしていたのが空き家。地域の集落には、たくさん空き家があるんですよ。何か新しい施設をぼんと作るよりも、今あるものをどう活用するか、佐治らしい、このまちらしい景観をつくるものは何かみたいな話で、そういったものを大事にしていかなあかんねんっていう。そうなったときに空き家を改修しながら何かうまいことできないかなと。関わり続けるしくみもそうですけども、地域のそういった困り事みたいなことを解決していけないかというところで、空き家を借りてこの活動を始めていくん

ですけど。テーマとしては、「まちの居場所づくり」っていうことで僕らが関わる場所でもあるんです。地域にとってそういう居場所みたいなのがなくなってきていると言っていていいでしょうか。

山田：たばこ屋さんがいいですね。あの看板ね。

出町：そうですね。こういう切妻の街並みがありますね。通りにこれだけ人があふれてて、わんさかわんさか過ごしている状況っていうのはまさに街全体がいろんな人にとって居場所になっていたというようなイメージなわけですね。言ってみたら商店街もこんな感じですよ。人があふれていて。お店として、商店街としてこのまちをどう復活させるというイメージよりは、人が過ごす居場所みたいな形としてこのまちをうまく再生できないだろうか。土間のお店のまま、そういったものを居場所づくりのために何か再生できないかなということで、考え始めました。



出町：僕らこの辺に家を借りてまして

山田：そこに家を借りてるの。

出町：それが佐治スタジオです。ここが中心街でして、二軒目ここに借りています。

一：二軒目もある？

出町：あります。あとこの真ん中へんにも一軒、これは管理を委託されてるんです。

山田：いいですね。3ポイント。端と端をおさえて、真ん中っていう感覚ですね。ばっちしやな。ということはこの間は、学生がうろうろしているわけ。

出町：うろうろします。

山田：ということは、もう空気感が全然違ってきてるね。

出町：そうですね。そういう意味ではちょっとおもしろいですね。

山田：おもしろいですね。なるほど。

出町：最初の空き家は一軒決まるまですごい時間かかりましたけどね。

山田：そりゃ最初は地元の人がどれだけ理解をしてくれるか。いろんな問題があったと思いますけどね。

出町：そうですね。借りようとするときに地元の方は「わたしの家改修してくれるんや」みたいな感じなんですね。「空き家やねんけど、ちょっとボロボロになってきたから、改修できへんから貸すよ」みたいな感じになってしまって、それで入ってしまうとまずいなみたいな。もうちょっと大きな意味で理解が得られないと、後々きついなっていうのがあって。けっこう難航したんですけど、たまたま僕ら借りた佐治スタジオのオーナーさんがすごく理解のある人で無償で貸しますと。好きに改修してもらってもいい。条件としては、もともと事務所として改修される予定だったので、そこに入ろう

としていた大工さんを使ってくれと、あとはまちづくり、地域のために貢献するような使い方をしてくれるのであれば無償で貸すみたいな話。



山田：なるほど。

出町：建築的なものをただやって終わりとか、ぱんってやって帰るんやったら貸さへんけど、持続的に関わって何か地域にプラスになることするんやったらむしろどんどん使ってほしいと。

山田：その人はまちのどんなポジションにいるの。

出町：まちの中では産廃処理やられている方で、特に何かそのまちづくり協会とかメインでやってる方じゃないんですよ。

山田：そうですか。(まちづくり協会)とか入ってない。

出町：むしろそういうところには出てこないような人なんです。けどみんなからは人望すごい厚くて。

山田：それはすごい。

出町：そういうすてきな方と出会えて。今この地域にどんなことが必要なのかとか、僕らが入ってくることの意味みたいなこともよく理解してくれて、いろんな意味でサポートしてくれています。僕も入りたての時はけっこう怒られまくって、

いろんな問題で。スタジオを借りた時もいろんなところで調整してくれて、そういうのがあって少しずつ地域の人の信頼を得たというのがあるんですけど、そういう人と出会えるというのが、大きいですね。

山田：大きいですよ。その人と出会えたというのがまず成功の第一歩ですね。

<学生が主体的に関わる活動>

出町：住環境をまずよくしようと思って、改修をしました。じゃあどういう改修をするねんっていったときに、まず、いい景観をつくろうっていうのが一つあるんですけど、それはとくに意識しなくても無理をしなればいいんじゃないかと。あとは学生が主体的に改修を行うっていうのが重要な。

山田：そうですね。手作りのにね。



出町：地元の木材とか使ったらいいんじゃないかと。小さな簡単な改修方法、とにかく簡単な、板張ってぱんみたいな感じで。たとえば寒い家を暖かくする時にはどうしたらいいか、サッシを変えて気密性をあげようとか床暖房入れようとか、いろんな考え方があ。そういうのどんどん排除して、簡単に、寒いんだったら

木を厚く張ろうとか、窓には障子を入れようとか。そんな簡単なことでどれだけ環境を変えられるか。地域の資源を使ってどれだけ地域の環境を良くできるかみたいなこと、そういうことがすごく重要なことなんじゃないかと、いろんな意味で思いました。あとは改修の過程を、僕は、ビニールシートを張ったりとか、見えなくするんじゃないかととにかく見えるようにして、常に地元の人が手伝いに来たりしてもらって OK とか、途中で見に来てもらっても OK だし、口出し OK みたいな感じですね。改修途中で、たとえば、最初は土間をたくさん入れようとしたんですね。

山田：なるほど。

出町：簡単に地域の人たちが入ってきて交流できるようにするには土足のまま入れる方が面白いんじゃないかって。とくに昔は土間がいっぱいあって、それでいいこうと思ったんですけど。そんなこと言ったら、地元の方から「寒い」って、「この地域は寒すぎるんだ」って「土間にされると僕らは来ない」って。冬の寒さを知らないからそんなことが言えるんだって怒られてですね。

山田：なるほど。

出町：なるほどな、そんなこと全然考えなかったって。そういったことがあったんで、地元の人と一緒に使える感じで。これが改修途中です。こんな感じで学生が解体して。

山田：そりゃこれやったら学生戻って来ますわ。

出町：そうですね。楽しんでやって。

山田：自分が作ったところがね。

出町：そうですね。まあ建築学科の学生だし、そんなことに興味あるんやけども僕ら学べないことばっかなので。

山田：そうです。実際に。理論的には学んでますけど。実際に自分で、手で作ってやるって、のこぎりで切るっていうこと自体が。そして木のおいがわからない人が多いですからね。

出町：そうですね。杉の木とヒノキの木の違いなんてのも、最初来た時ぱっと見てわかんないわけです。木を触って。大工さんが、30歳くらいの若い大工さんで、年も近くて感覚的にも結構理解してくれる大工さんだったんです。いろいろ丁寧に教えてもらいながら、全部実践させてもらえたんです。かんな削ったりとか。どういうところにどういう木を使うのとか、そういう道具的なことも教えてもらって。右は地域の人と交流会してる時の写真です。改修途中ですけど忘年会をやってるんですね。1年目の時も忘年会やってるんですけど、かなり地元の方も来てくださって、50人くらいだったと。



山田：50人。地元の方は増えてるんですね。

出町：増えてます。

山田：逆にいえば、若い子と接点を持ちたいんです。エネルギーをもらうような感じでね。

出町：最初は学生にエネルギーたくさんもらってわーっとやってるんですけど、最後のほうになってだんだん酔っ払ってくと、地元の人どうしが話し出すっていう。どんな会話してるかっていうとなんてことない、すごい近所らしいんですけど、すごい何年ぶりとかの話とか。

山田：何年ぶりとか、若いころはこうやったとかね。そういう話ですわ。

出町：そうそう。

山田：幼稚園とか小学校のときには一緒に遊んでたけども、ちょっと成人になったら仕事に出たりとかで全然離れてると。それがこんな時になったらまたその当時の話に戻るとね。

出町：そうですね。

一：普段あんまり話さないですか。

山田：話さないです。

出町：特に、話す場所がないんです。

山田：全くないですわ。商店街でも話す機会が全くないんですわ。というのは、商店街行きますでしょ。宴会、新年会とか。我々からすれば、商店街の人ですから、もうずっと会ってると思うんですよ。それがあるところいったら「久しぶり」「30年ぶりかな」「あんた今何してんの」とかそんなの。最初は飲み会したら昔のことが出てくるんですね。今度は、そう

なってくると逆にいえば、子どもの頃のリーダーが、また自分がリーダーになって「お前これやれ、あれやれ」でまた自治会が生まれてくる。全く同じ、今（出町さんが）言ったのと。

出町：へー。それはおもしろい。それはぜひ地元の人に聞かせたいぐらいです。

<居場所があるからこそ体験できる>

出町：地域に拠点があるのでいろんなことできるぞってことで、大学の環境都市工学部の授業で、学生が設計や課題する授業をやったりするんです。泊まり込みで夏休みとかに、先生六人ぐらいにそれぞれ専攻分野に授業やってもらいました。左側（の写真？）は、ワークキャンプって行って一週間滞在して地元の生業を体験しようっていうことで、なんせ一週間暮らしてみたら変わるよね、感覚っていう。ああいう場所があるから長期の滞在ができる。農業とか林業とか、森林組合行ったり、地域の景観を守ってるものを内部から見てみようっていうこと。そのいいところとこれから抱えていくであろう問題を、やっぱり僕ら感じていかなければいけない。そういうテーマで授業をしました。これは好評で、林業とかどう感じるか知らないですけど、丹波のことすごい気に入ってくれてるといって。一週間もいけば。

山田：体で感じるっていうね。いいですね。体で感じるっていうのがね。理屈なしで。

出町：いいですね。森林組合も毎年行くんですけど、山登りも全然苦じゃなく、

斜面ダーって登ってたような感じです。一番最初写した写真って、山の上からきれいな写真だったんですけど、実際こういうの体験すると、きれいじゃないんですよ、ある意味で。危ないっていうか。山は間伐されてなくて荒れ放題だし、田んぼもきれいそうに見えるけど端っこの方は旧工程のまんまだし。担っている人たちはといえば高齢化がすすんで危ないぞみたいな。10年後、20年後どうなってんねんこの風景みたいなこと実感しちゃうというか、嫌でも危機感を覚えちゃう。



出町：農村地帯なので、お祭りがたくさん残ってるんですよ。秋祭りとか。みこし担いだりとか、伝統が残ってるんですけど、担い手が少なくて、どんどん祭りも統合され減っていっています。こういった大切な文化が、僕らが入ることでまた元気になるっていうのもあるし、僕らにつられて若い人がまた参加してくれたり、そういう形になればいいなと思うし。担い手である人にも、これで若い人にも受け入れられてるっていう自信になれば。もう古いからこんな若い子は嫌いなんやみたいなことをそういう人はすぐ言う

んですけど、「いや、そんなこともないよ」みたいな。

山田：それを、本来若い人はしたいんです。

出町：ああ、なるほど。

山田：したいんですけども、機会がない。

出町：そうですね。

出町：これが2軒目の家です。

山田：これもいい家ですね。

出町：この家はほんとに昔のお店の形です。間口が狭くて、奥行きが30メートルくらいあるんですけども、母屋と台所が離れている。表通りの自転車屋さんだったところがあって。

山田：お店だったんですね。

出町：だから土間が比較的広いんです。ほぼさっきと同じようなイメージで改修したもの。

山田：いいですね。これもいいですね。

出町：板の土間を作って、掘りごたつに囲炉裏をして、みんなで集まってご飯を食べる場所にしようっていうんですかね。ご飯じゃなくても集まれるような場所。もっと具体的に、地元の農産物とかおいしいものがたくさんできる、そういったものを囲みながら交流できる場所みたいな。

出町：これが3軒目の空き家で、これは管理を委託されて改修は何にもしてないんですけど、空き家をどう使っていくのかっていったときに、最初言ったように、若い子たちがまた帰って来たい場所にしたと思うならば、やっぱり若い子たちも巻き込んでいかないといけないだろう

ということで、すぐ近くに高校があるんですけど、その高校生たちと一緒に空き家を使ってみようということです。

一：高校生。

出町：地元の高校生たちです。彼らと空き家を使うことで彼らの居場所みたいなのを作れたらいいなど。一緒に作業すればそこが居場所になるという簡単な図式を僕はイメージしてて。そんなこんなで二泊三日くらいでやった。

山田：一応、間伐材を利用して、天井から吊るしたり、ジャングルみたいな感覚で。

出町：そうですね。高校生たちと学生が一緒になって、まちのなか写真を撮るんです。携帯で撮るんです。その方が高校生には受けがいいんです。気軽に。カメラを持たすと撮らないんです、写真。携帯だとパチパチ撮るんで、あほほど撮らせて。ギャラリー展をやろうと思ったんです。僕たちが見てるまちの姿みたいな。地元の人、大人たちは見えてないけど、子どもたちはこういう風にまちを見てるんだみたいなものをやろうと。

一：なるほど。グッドアイデアですね。最近社会心理とか社会学でこういうのやり始めましたからね。

出町：あの壁に貼ってあるの全部写真です。これはけっこう好評で、地元の方は喜んで。あとはもっと高校生と、これはちょっと建築を離れちゃうんですけど、地元の資源を復活させたいなと思っていて、たまたま5年ほど前にうどん屋さんがあったところがつぶれて、「土田うど

ん」っていうんですけど、土田さんが作ったうどん、このまちは讃岐うどんが入るのがすごく遅かったまちで、先にその「土田うどん」っていうのが入ってたんです。このうどんは讃岐うどんとは逆のうどん、こしがなくて太いんです。ほんとやわらかくて、煮込むと溶けるっていう。みんな冷やしうどん食べるんです。

山田：伊勢うどんみたいやな。

一：伊勢うどんっておいしいんですか。



山田：うん。まあ醤油で食べるんでしょ。

出町：讃岐うどん食べたときは衝撃で、これうどんじゃないみたいなことを言ったらしくて。こしがあって疲れるとかですね。地元はめちゃめちゃ愛してたうどんなんですけどね。それがなくなって、僕らがこのまちに来た頃には、うどんを復活させたいんだっていうのがまちの人の想いだったんですよ。けど僕らまだなかなかそこにはいけないみたいな話をしてて、でもずっとその思いはもってて、ちょうど改修とか一通り終わったとき、そろそろ空き家活用みたいなこと考えてみると、うどんって結構いいんじゃないかって。地元にもともとあったもので、地元の人が愛着を持ってるものをきっか

けにしたらいんじゃないかってことで、それを僕らだけじゃなくて高校生たちとか、地元のおじさんたちとかと一緒に復活させようってことで。さびてた製麺機械を復活させるところから始めようって。最初のうちは全然ほど遠いと言われながらもだんだん最近「おいしい」とか言われるようになってきて。その学校の中に畑があるんですよ。

出町：牛小屋があって豚小屋があったりですね。とにかくおもしろい高校で。なんですけどその周りの人との間にあまりつながりがなくて。なので、ここに若い子たちがたくさんいるのになんで彼らと一緒に何かしないんだって思って、一緒に野菜作って、空き家を使って野菜を売る店をやろうよってなったんですよ。ちょっと休憩できるスペース、高校生たちの居場所みたいなのを作ってあげて、地元の人たちと高校生が何らかの交流をもてるような場所を作ろうということで、そういうプロジェクトもやっています。



出町：これはまたちがうまちなんですけれども、この氷上町っていうところは愛宕祭りっていう火の神様のお祭りがある。造り物っていうのを作るんですよ。飾り

物なんですけど、10町内くらいで一つ、10個くらい作ったんですけど、倉庫とかいろいろなとこ使って瀬戸物とかで、お城を作ったりとか。そこに僕らも入ろうということで、最初はその街並みの景観のこと考えて空き家活用しようと思ったんですけど、なかなかやっぱり難しくて、地域の人々の理解を得ようとしたら祭りを盛り上げるほうがいいんじゃないかって。学生たちが僕らもつくりものを作るんだったら、何かおもしろいことをやりたいということで、コンペみたいなのをやっていいですかって話になって、おもしろいみたいな感じになって、いろんなのが十案ぐらい出てきて、それを地元で公開したんですよ。地元の人たちとデザイナーの人たちも大阪から呼んだりとかして、選んで。これは丹波の木材で、端材ですね。製材所で出てくる端材。ゴミみたいなものです。それを一式ダーッと使ってそれで丹波の山を表現しようってことになって。

山田：これはいいですね。

出町：今まで、若い人たちはつくりものって見るだけだったんです。面白くないですよ、やっぱり。見に来る人もだんだんマンネリ化してきて、毎年同じような感じで、ガンダムができて、そのときは流行ってもどうせ今年はあれだって。今年は何も鬼太郎がはやったんですけど。そういうのじゃないつくりものを作りたいなど。中に入って過ごせて楽しいぞみたいな、つくりものっておもしろいなって思えるようなものが重要なんじ

やないかと。

一：どこか通じますね。

山田：全部通じますわ。



出町：子どもたちが遊んでる、森の中にいるような感覚ですね。

山田：そうですね。下のあれがいいです。チップ。

出町：あれも端材なんですよ。それも一気に木の皮でふわっと。

山田：においがぷーんとしますから。

出町：まちの中まで充満してるんですね。

山田：丹波の子どもですからね、においまだわかってるんです。これ街の子どもやったら市内の子やったらもっと衝撃的ですよ。このにおいは。木のおい。知らない人いますもん。

出町：そうですね。

山田：あのアトリエで一回、真ん中にやって、好きなようにチップを埋めたらおもしろいですよ。

一：おもしろいですね。

山田：アトリエへ子どもが来たら、好きなように板一枚どこかに付けたらっていう感じ。好きなようにつけていく。いろんなオブジェになる。

山田：こないだ、うちの事務所のスタッ

フの皿田が、通天閣、新世界のところでちょっとしたイベントやったんです。その時にシャッター通りの市場があるんですけれども、そこで、地元の小学生を呼んで、段ボールに好きな色塗れと。赤とかブルーとか。大きさとかいろいろなほりもんの段ボールに塗るんです。何枚か塗ったら、それをみんなが一枚ずつ持って、今度はその段ボールに両面テープ貼って、子どもにシャッターのところに好きなように貼ってもらう、バーンと。何人もの子どもが貼っていくと、いろんなパターンの絵になる。おもしろいですよ。というのは、絵を描くといったら嫌がりますでしょ。ですけど、色塗ってそれをべたっと貼るだけなんです。個々にね。こういうのもおもしろいですわ。木でこういうのやるっていうのは。おもしろいですよ。

<地元の社会づくり>

出町：僕らが今年から始めた企画なんですけれども、空き家を活用するサークルを作ろうと思いました。僕らが使うんじゃなくて地元の方が主体になって使うサークル。最初は、空き家はとにかく使えばいいやみたいな話にとりあえずはなるんです。ワークショップをすると、とりあえず使わなきゃって話なんです。その先に話が進まないんです。「じゃあどう使います」「カフェになります」「だね」みたいな感じで終わるんです。

山田：誰がやるの。

出町：「わたし一人でやるの無理」とか「毎日はできない」とか。そんな話でつ

ねに頓挫するんですよ。「じゃあもういいや」みたいな感じになって。とりあえず場所をまず作るから、実験的にやろうみたいな感じ。たまたま僕らが佐治スタジオと本町の家を2軒ともう1軒、3軒あるのであれを自由に使えるようにしよう。サークルみたいなのを作って、会員の方は自由に使えてお店もできるし実験的にやろうと。それでええ感じやなと思ったらほかの空き家を使ってお店出しましょうと。段階的に空き家を使うような仕組みをつくらうということで佐治倶楽部を立ちあげました。



一：何人くらい参加してるんですか？

出町：今で会員自体は20人なんですけど、まだまだ。11月から始まったばかりなんで。

一：でも20人は、最初の年としてはいい規模だよな。

出町：会員になれる人は僕ら学生と地元の方、都市部の方なんですよ。もう混ぜちゃって。佐治倶楽部だから佐治だけ、じゃなくて、佐治で活動するから佐治倶楽部。

山田：いいですよ。それがいいですよ。

出町：芦屋のバーのマスターが来たりで

すね。丹波の地鶏を使ってお店やったり。飲み物と食べ物自分で持ってきて、僕ら用意するのはおつまみだけです。季節のものでおつまみを作る。豆腐でがんもどきつくったり、今週の金曜日はふきのとうで天ぷら。そういうのでちょこちょこやって。

出町：神戸のガーデナーの人と一緒に、毎月1回、もう1年くらい、お花屋さんやったりとかガーデンショップやって、ちょっとおしゃれな、品のいい緑をまちに増やしていくのもいいかなみたいな。ガーデニングすると人が外に出るきっかけにもなるので。お花を売るだけじゃなくて、神戸スペースみたいなのを作って、バーテーブルみたいなのを作って、ガーデニングをきっかけにして人が集まれる場所にしようということで。上の方は「豆腐屋さん」って書いてありますけど、豆腐屋さんがあるので、本町の家のお囲炉裏のあったところで湯豆腐屋さんをやった。

山田：湯豆腐屋さん、ええなあ。



出町：地元の方が来てなんやかんや言っていて。あれ12人くらいしか座れないんです、ふつうに座ったら。けどこのとき18人くらい。きゅうきゅうだったんですけ

どね。それがまたよくて。きゅうきゅうになりながらみんなが交流していると、世代も越えているんな人たちが集まってますね。

山田：これおもしろいですね。結局基本的には、ほんとのまちづくりというか。そうなってますよね。

出町：そうなんですよね。そんな感じですよ。

山田：ですから将来的にはこの佐治倶楽部、佐治のまちがものすごい変わるような感じしますね。時間がたてば。

出町：そうですね。そういうイメージ。僕らが主導で始めたことなんですけど、佐治倶楽部はどちらかという地域の方が中心に移行するシステム。

山田：そうですね。ものすごい変わるような感じしてきますね。これ見てましたら。

一：素晴らしい。

山田：逆にいったら、まちづくりってそれやと思うんですよ。時間かけないとね。一気に物事をずーっと進めて補助金をどんと入れてやるのではなしに、じっくりと時間をかけてじっくりじっくりやっていくのがね。ですから10年、20年かかるんですよ。結果を求めるんじゃなしに、継続でやっていくのがまちづくりやと思うんですけどね。そうやっていけば一気にいつしか、何かの時に爆発するんですよ。一気にスピードアップするんですよ。それが今の商業施設でいえば、大阪の空堀通りとか南船場とか、堀江地区。あれがそうなんです。一軒、二軒がちょ

びちょびできてきてて、一気にどっと。そうなるんですね。そしたらみんな若い子たちがあのまちはおもしろいってことで、みんな行くようになるんですね。

出町：そうですね。僕らこういう場所って、観光地化なんて最初から頭にはないんですよ。どっちかっていうと地元の人には観光地化しようとか言って、そういう話でとりあえずよんできたりとかするんですけど、そうじゃないんですね。

山田：やっぱり、仕掛けてやるやつはなかなかものにならない。とくに観光なんて仕掛けるものじゃない。やっぱりその土壌から来るものでね。ですからああいふイベントなんかでもみんなそうだと思うんですよ。昔どうのこうのって何かストーリーがあつてのイベントっていうのはいいんですけど、Aというところでものすごい成功したから、こっちでイベントやったらいいっていうものではない。ですからこれはじっくりじっくり地につけてやっていますから、これはものに絶対なると思いますわ。時間がかかりますけどね。

出町：時間がかかります。でもそれを大学が授業をやるのを認めてくれたりとかして、学生が関わり続けられるように大学がずっとサポートしてくれるっていうのがすごい大きくて。そういうのがないとなかなか厳しいところがあると思うんですけど。でもここまで来たら地元の方も理解してくれて。

一：だんだんそのしくみ作っているとこがいいですね。

山田：そうですね。地元が動きだしてきたら、一緒になってやっていけますからね、物事がね。



山田：最初はだいぶ苦労されたと思うんです。まちづくりの典型的なもんなんですけど。その土地へ行きますでしょ、そうすると我々よそ者なんです。地元の方はよそ者が入ったら警戒するんです。ですけどもバリアが取れるには3年、4年かかるんです。ですからまちの活性化とかまちづくりしようと思ったら、本来ならばどっぷりそこへ入らないとできない。よくまちづくりの指導しに行ったりとか、商店街の活性化に指導で行きますでしょ。それは商店街の人はただ聞いているだけなんです。実際にそれをやろうともなんとも思っていないんです。ですけどもそこでじっくりと地をそこへつけて指導していく、一緒になってやるということになったときに初めてバリアが取れたら、そこからが始まりですわ。スタートです。ですから、天神橋筋商店街なんかでも僕が付き合って10年近くなりますけど、やっぱりそういうことです。10年以上経たなあかんのです。やっぱり、でないとなかなかよそ者との間が出てくるね。ですから、これなんかでも、これから地元の

人ももうバリアが外れてきてますから、これからよくなると思います。一気によくなってきますわ。

ー：3軒に増えたのはいつ？

出町：3軒目の改修してないところは前からなんかあるごとに使っていてと言われてたんですけど、その人がアメリカにおられて、たまにしか帰ってこられないんです。

ー：2軒目は？

出町：2軒目のところは一年前です。

ー：1年前、スタートしてから4年目のところから、だいぶ出町さんはただやり逃げする人じゃないなという。

山田：そうなんです。まず地元の方は、あの人来て、いい話してくれるけども、何かあるんじゃないっていうことから始まるんです。それがずっと地元で生活して地元で、これ本物かなっていう感じになってくるんでしょうね。そこからいろんな相談がまた出てくるんです。

出町：そうですね。それはあると思いますね。

山田：このまちのあと10年後ぐらい、5年後ぐらいになったら、今度ははじめてそこで観光になるんですよ。観光地になりますわ。要は、おもしろい街並みがある、おもしろいお店があったり、おもしろい景観があるということで観光客が来るようになる。最初から仕掛けるやつというのはダメですね。なかなか成功しません。

出町：観光で来る人もいるかもしれないけど、やっぱり地元の方がいちばんたく

さん来ていて、なんか楽しんでいるみたいなどころに観光客もいるみたいなイメージを僕らは描いてはいるんです。地元の生活の中心でもあってそういったところに人も来るみたいな感じにしたいんですよね。

山田：これはおもしろいですね。

出町：僕らの研究室が建築環境デザインなんです。建築をとりまく環境のデザイン。なので、僕ら専攻を聞かれると「建築環境デザイン」っていうんですけど、建築作るだけが目的じゃなくて、もっと大きな環境のことをデザインするみたいな感じなんです。

一：これは地元の社会づくりですね。

山田：社会づくりですわ。ですからいろんな要素が入ってます、この中には。



<地元のためのまちづくり>

山田：震災のとき、長田と JR 鷹取駅間の商店街が火災で全滅したんですよ。その換地から町びらきまで、僕 8 年間関わってました。いろんな人のヒアリングをずっとやりましてね。答えが出てきたのはなにかといえば、商店街の人、あんまりつながりが少ないなど。震災になってつながりが起こりましたがね。それまでは（つながりが）ない。

山田：（再興後の）街並みといえばやっぱり街路樹を植えたい、商店街の横に川を流したいっていう話もありました。都市景観の専門の人がそういう計画をもってきたわけです。僕は「それどうなんですかね？」って。というのは、川を流す、街路樹を入れる、それは行政がやります。あとの管理は誰がやるんですか。行政は、「（やるのは）地元の人だ」というわけです。街路樹ということになれば、広葉樹になるでしょ。そしたら秋になれば葉っぱが落ちますよね、商店街の人に聞いたんです。「葉っぱ落ちたらみなさん掃除しますか」って。みんな黙ってるんです。疎水を流したら葉っぱが落ちたら詰まりますよね、人工の水流すわけですから。

「それをみなさん掃除しますか、しないとどぶ川になりますよ」っていう話をしていたんです。黙ってるんですね。誰がやるかっていったら行政がやるっていう感覚が当たり前なんです。そうじゃないでしょ、まちづくりっていうのは。

山田：いちばんお金がかかって、将来的な遺産になるのは、無電柱化です、電柱をなくそうって。今、まちでどんどん電柱なくす無電柱化やってるんですけど、なかなかこういう鷹取みたいな商店街で無電柱化なんてできませんが、今ならできます。これが将来はできません。やるなら今です。費用がかかりますから。ですから、それをやります。そしたらものすごい、やっぱり空が見える、空が見えるっていう感覚ですね。そういうふうにまちの人が景観を（自分たちで）管理

ができるかどうかという部分も考えていかなければいけない。

出町：そういう街路樹も誰かに言われてやるんじゃないで、ほんとに自分たちが欲しいという話であればね。

山田：欲しいという話であればやりましょうと。まちの中に緑を入れるのはいいんですけど、地元の人からの声でないと、入れたらこわいですよ。ものすごくコストがかかりますもんね。コツコツやって、(それが)広がっていけば地元の人が意識をもってきます。ここだと思えますね。

出町：この佐治倶楽部もルールが一つだけあって、言いだしっぺがリーダーなんです。誰かにこれやれとか、お前これやってみろよとかいうのはナシなんです。そういう企画は通らないことにしてるんです。自分で「俺これやってみたい」という企画だけ通るみたい。主体的に地元の人がやるっていうことを作りたいと思っているのに、誰かに与えられてやらされるっていうのは今まで通りなんです。なんかこんなんやってみたいねんけどっていったら、じゃあこんなんしたらどうみたいな感じで、議論するような形にしていきたいなと思ってまして。そこらへんで僕らは自分でこんなんやりたいたか、いろんな種はまいてるんですけども、基本的には言いだしっぺがリーダーになって、それをみんなで支えるんだみたいな形を少しずつ作りたいなっていうのが、一つのルールというか。

山田：そうですね。たしかにそうだと思

いますよ。みんなが自分で自主的にやっていかないと。義務的にやるやつは疲れます。

出町：だから全然ない時もあるかもしれないですけど、忙しい時もあるし、無理せずやるっていうのもいいかなと思って。

山田：おもしろいなあ。これがまちづくりですわ。建築ではない。ハードよりソフト面です。

ー：建築が種になって、そして自然に人の集まりができた。

出町：そういう環境をハードがちゃんと支えてるっていうか。

山田：コミュニティみたいな感じですよ。ソフトですわ。

ー：ハードとソフト。

出町：どっちかの比重によりすぎてしまうと、ダメだから・・・



山田：それと継続ですね。やはり継続です。単年度で、2年や3年で答えを出さとかいう話ではないです。

ー：「関わり続ける」スパンはどのくらいで考えるんですか。

出町：そのスパンすら設定しないというか。

山田：設定しないんですけど、どうして

も設定しろと言われるのであれば、僕はよくいうのは、30年って言います。

一：30年。

山田：というのは、企業が30年ですよ。だいたい企業の寿命というのが。それと一緒にね、これもそんなもんちがうっていうことで。

一：なるほど。

山田：10年ではない。

出町：そうですね。そんな程度ではないですね。子どもや孫を連れてくるような故郷にしたいと僕は言ってるんで。それくらいのスパンで。

山田：そうそう。今はまだ小さい、(作品を)作ってた小学生が結婚して、おじいちゃんになって、おばあちゃんになって帰ってくるぐらいのやつがいちばんいいんです。今、行政全部が、産業、工場誘致をして、雇用問題を解決して、地域に人を戻そうとしていますよね。雇用は、問題でしょうけども、企業が来るか来ないかって言ったら、なかなか時間もかかるわけです。それよりも、週末に帰って来る、どんどん人が入れ替わり立ち替わりこっちへ帰ってくるっていうか「いってらっしゃい」「おかえりなさい」の世界ですよ。

出町：そんな感じです。

一：おもしろいですね。「いってらっしゃい」「おかえりなさい」

山田：うん、「いってらっしゃい」「おかえりなさい」ですわ。

出町：僕らが学生たちと初めて丹波にきたとき嬉しかった言葉、印象的だったの

は地元の人に「おかえり」って言われたんです。

山田：そうですね。それやと思いますわ。

出町：めちゃめちゃ学生も喜んでたし僕らもうれしかったし。

山田：それでまた帰りに「いってらっしゃい」っていう感じですよ。また戻っておいでよっていう感じで。

出町：そういう関係が作れてきてるっていうのは学生にとっては、帰るきっかけ、理由ですね。それだけで十分なんですよ。地元の人にそんなふうにも思ってもらってるみたいなのが。

山田：あとはこういう過疎地になればなるほど高齢化が進むわけですから、問題はありますけどそのなかではやはり、そういう新陳代謝がどんどん動くようなまちにしていくっていうことやと思いますけど。

出町：そうです。



<バードハウス>

山田：こういうやつもね一回テーマにしてくださいよ。バードハウス。

出町：おもしろそうですね。

山田：面白いです。なんでもいえるからね。一番最初は2人から始めました。

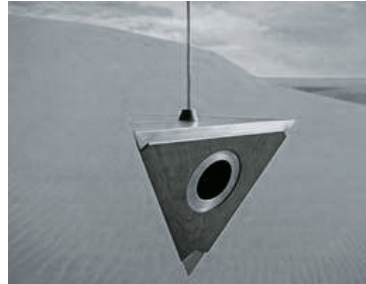
出町：そうなんですか。

山田：そうそう。2人だったんです。そこからじわーっときてるんです。一番最初は、小泉産業が創業30周年の記念に何かイベントがないかという話で、その時に今やってるもう一人の芳野さんっていう人がなんかいやろかってことでバードハウスをやった。小泉産業はキッチンとか照明器具とか家具を作ってますから、要するに、環境仕様の住宅提案をしよう。住宅の環境というのはモノが大きいですからね。バードハウス、巣箱っていったら小っちゃいやん。これおもしろいなと。これをいろんな人にデザインしてもらおうのやったらどうやらなから始まった。一番最初、建築デザイナーのバードハウスにしたんですよ。安藤忠雄さんとか、ピーター・アイゼンマンさんとかに頼んだんです。

山田：最初我々わかりませんから、バードハウスですからね。日本鳥類研究所ありますでしょ。あの研究所や他の色んなところへみんな行きましたもん。でも、ぱーんと玄関払いとかされて、いろいろやってですね、あかんなー、やっぱりあかんのかなって言ってたんです。というのは、基本的には巣箱なんですけど、鳥が通うわけでもないんでね。

山田：そこから徐々にいろんなジャンルのものをやって。我々は基本的には作家の方にデータとか作品集を全部送って、考え方を説明します。作品を作ってほしいんだと。作品については製作費をお渡しします。ですけど、その制作費以上のものが必ず出てきます。作品が出来たら

我々がピックアップにいきます。ピックアップしに行ったときに、作家の人のコンセプトをプレゼンテーションしてもらいます。その時にカメラマンも連れて行って写真撮って、冊子に載せていきます。



山田：作家の人に言うのは、「我々がお礼としてできるのは今回のパンフレットをお渡しすること」と、「作品は大事に扱わしていただいて、いろんな人に見ていただきます」っていうことだけです。あと何もない。

山田：僕は時間的にいけないですけど、毎回、写真撮りを世界各国行ってます。砂漠をテーマにした時は、ゴビ砂漠へ行ったり、いろんな砂漠に行きました。グ

ランドキャニオン行ったり、オーストラリア行ったり、いろいろ行ってます。それは学生にアルバイトで行ってもらいます。学生のアルバイトには、アルバイト料は渡しません。そのかわり、「普段は行けないようなところに行けるよ」と。交通費だけはこちらが全額出します。ディスカウントチケットで行ったらものすごい安いんですよ。運送料と航空運賃でいったら同じくらいなんです。そしたら向こうでセティングとか手伝ってもらえますから、楽なんですね。

一：それで向こうでば一つと組み立てて写真だけ撮って。

山田：写真撮ってまた帰る。ですからここにあるやつ全部そうです。

出町：合成じゃないですよ。

山田：ちがうですよ。全部現地行ってるんですよ。

<人と人とのつながり>

出町：今僕ら佐治スタジオって持ってるんですけども、関大前にも千里山スタジオっていう形でスタジオを作りたいなと思ってるんですよ。関大前にも空き店舗とか空き家とかけっこういっぱいあって。

山田：そこでこういう（丹波でやったものと同じ）やつをやって、佐治のまちは今現在こんなですよ、とか。

出町：情報の交換ができるように。都市部にいながら、丹波のことを感じられる場所、丹波から都市部に出て行った人たちが、身近に丹波を感じる場所を都市部に作ってあげるみたいな感覚。

山田：まさしくそう、それ。というのは、今僕が企画やっているのはビジネス的な部分があるんですけど、高野山の企画をやってまして、高野山があと4年後に開祖1200年にあたるんですよ。世界遺産になってますが、高野山のあの空気感をみんなに味わってもらうのがいいんじゃないかと。ですから、「高野山カフェ」というのを、東京の丸の内と青山でもう3年くらい前から本山がやってるんです。一：そうなんですか。

山田：高野山カフェでは精進料理を出したり、写経をしたりする。そういうふうなやつが、大阪にもあり東京にもありということで、そして空気感を味わってもらおう。サテライトには高野山の木を素材として貼るとかね。高野山の間伐材を利用した壁紙を貼っていくとかしてその本物の感じを味わってもらおう。そういうやつが必要。それと同じで、ここのまちな木を使って空気感を味わってもらいながら、「あそこへ行ったらこういうまちがありますよ」という。やったらいいと思いますよ。

出町：関大前の商店街の再生といたらちよっとおおごとですけど、これからいろんな形でそういうとこに僕たちも入って一緒に考えるきっかけにもできるんじゃないかと思います。空き家問題って丹波だけじゃないと思いますし。

山田：今、過疎地の村なんかはほとんどそれに悩んでますでしょ。過疎地のまちをどうやって守っていくか。家をね。人が住まないと、家ってどんどん劣化して

いきますからね。住まないといけないですよ。

出町：当分丹波から抜けられないなって言って。まあ抜ける気もないんですけど。ずっと関わっていくので、抜けるとかそういう感覚でもないんですけどね。

一：「関わり続ける」という方法しかないとする、出町さんみたいなすごい貴重な人的な資源がそこに張り付いちゃうわけですね。そこが弱点だけど、きちんと宣伝して、それを見に来る人がいて、それでさらに広まっていくというようになればいいですね。

山田：広まっていくっていうのが大きいですよ。

出町：そうですね。

山田：佐治倶楽部も（大阪で）募集したらいいですね。



出町：STEPで宣伝してもらって。

一：もちろん。いつでも。手伝えることは何でも手伝いますよ。

山田：おもしろい、おもしろい。これはいいです。

一：基本山田さんのお話もそうだし、出町さんの目標もそう。やっぱり人のつな

がりを作るしかないってことですよ。

山田：そうです。人のつながりです。

(おわり)